## 猛、初めてのジョックストラップセックス

「この間は悪かった、猛。
　心の底から反省している！」
　泰輔に目の前で土下座をされ、猛は戸惑った。
　心当たりがないから戸惑ったのではない。
　心当たりはあるが、猛にとっては既に終わったことだったので何を今更と思ったのだ。
　一昨日、猛は泰輔とアナルセックスをする予定であった。
　泰輔に乳首を嬲られて焦らされ、さあアナルセックスを、というタイミングで泰輔がゼミを忘れていたことが判明し、アナルセックスは当然ながら中止。
　猛はチンポを待ち望んで疼いているケツマ〇コに苦しめられる破目になる。
　その後、耐えきれなくなった猛は三宅主将にケツマ〇コを使って貰えてようやく助かったのだ。
　だから、泰輔に放置プレイで本当に放置されたことは猛にとっては終わったことなので今更土下座をされても別に思うところはないのだ。
「今度からはスケジュール管理はきちんとしろよ」
「というわけで、お詫びの品を用意した！」
「いや、話を聞けよ」
　猛は土下座をしたまま紙袋を捧げ持つ泰輔にツッコミを入れた。
　紙袋は片手で持てる程度の大きさだ。
　総菜パンだろうか。
　昼食代が浮くかな、と一瞬考えた猛は己のさもしさに首を振った。
「いや、そこまでしなくていいから」
「受け取ってくれ、猛！」
　朝食を食べた直後だし、猛は別に腹も減っていなかったので遠慮しようとしたのだが、泰輔は土下座をしたまま猛に謝罪の品を受領するよう求める。
「受け取ってやれば、猛」
「危ない品ならそのまま捨てればいいんですよ、高坂先輩」
「というか、泰輔の馬鹿、何を用意したんだ」
　居合わせた剣道部員たちは無責任に猛にお詫びの品を受け取るよう求める。
「分かった」
　このまま拒み続けても話は進まないことを察した猛は、頷いてから紙袋を受け取った。
　そして、首を傾げた。
　総菜パンか何か、食べ物だと予想していたのだが紙袋の中身が思ったより軽いのだ。
　猛は食べ物じゃないのかと思いながら紙袋を開けた。
　紙袋の中にはビニール袋に包まれた何かが入っている。
　猛はビニール袋を取り出し、その中身を取り出した。
　カップ状の赤い布には中央に青いラインが入っている。
　その赤い布には黒いゴムが何本か伸びている。
　猛はよく分からない品を手に持ち、ぐるぐると回した。

「うっわ、ジョックストラップじゃん」
　剣道部員の一人が猛が弄んでいる布を指差して驚いた顔をする。
「ジョックストラップ？」
　猛は聞き覚えのない単語をおうむ返しをする。
「泰輔……前から怪しいと思っていたけど」
「ここまでホモホモしいとは思わなかったですよ」
「女の子に振られ過ぎて猛に走るつもりなのか」
「でも高坂先輩は皆のケツマ〇コ奴隷ですからね」
　剣道部員たちが泰輔に言葉を投げつける。
「ええと、このよく分からない布って、そんなにヤバいのか？」
　猛が問いかけると、泰輔ががばっと立ち上がった。
「よくぞ聞いてくれました！」
　しおらしく土下座をしていたとは思えないほど、元気よく泰輔が叫んだ。
　泰輔が猛の股間のもっこりをむがっと掴んだ。
「この猛のペットボトル早漏チンポをだ！」
　続いて泰輔が猛の手にあるジョックストラップの前袋を掴んだ。
「ここに収めることで卑猥なもっこりが顕現するのだ！」
　猛は泰輔の手を振り払うこともせずに、泰輔の言葉の意味を考えた。
　猛の手の中にあるジョックストラップは前袋とゴム紐で構成されているものだ。
　その前袋にペットボトル早漏チンポを収めるということは……
「これ、下着なのかよ！」
　猛は驚いてジョックストラップを泰輔の顔に叩きつけた。
「ひでえ！」
　泰輔が顔面で受け取ったジョックストラップを掴んで抗議の声を上げる。
「俺の気持ちをぞんざいに扱い過ぎじゃね！」
「普通、男が男に下着を贈るかよ！」
　泰輔の抗議に猛は反論をする。
　泰輔は親友で、何度もアナルセックスをした仲だ。
　だが、そのことが下着を贈られることはどう考えてもイコールで結びつかない。
　正直に言って、意味が分からない。
「お前、俺が下着に拘りがあることぐらい知ってるだろ」
　猛は泰輔に問いかけた。
　猛は常人よりもチンポが大きい。
　だからチンポにナイスフィットする下着は猛にとって貴重なのだ。
　緩いとペットボトル早漏チンポのポジションが頻繁にずれて落ち着かないし、きついとそれはそれで違和感がある。
　だから、猛の下着は普段は同じブランドの真っ赤なボクサーパンツで、気合を入れたいときは締め付けを調整できる赤褌なのだ。
「安心しろって！
　猛のペットボトル早漏チンポにぴったりフィットする奴を選んだから！」

「うげっ」
　泰輔の言葉に猛は呻き声を漏らした。
　いくら親友でもこれはない。
　はっきり言ってないにも程がある。
「だよなあ、猛の気持ちよく分かるわ」
「まさか、親友がストーカーじみたことをするなんて思いもしませんよね」
「ホモホモしいぞ、泰輔」
「貞操の危機を感じるべきだわ」
　剣道部員たちも猛に下着を贈ろうとした泰輔に否定的な言葉を投げかける。
「じゃあ、お前らは猛のエッチスケッチジョックストラップ姿を見たくないって言うんだな。
　俺一人だけでたっぷり堪能するからな！」
「いや、穿くなんて言ってないだろ」
　泰輔の言葉に猛が否定の言葉を投げ返すと、泰輔が背中から床にごろんと転がった。
「着てくれよー！」
　泰輔が背中を揺すりながら手足をジタバタと動かし始めた。
　教科書に掲載しても違和感がないほど立派な駄々だ。
「着てくれよ！　着てくれよ！
　俺の前だけでいいから着てくれよ！」
「いい年をして止めろよ！」
「やだねー！」
　見ている猛の方が恥ずかしくなって泰輔を制止するのだが、泰輔は止めようとしない。
「これはもう、着てやるしかないんじゃね？」
「そうだなー、泰輔がここまでするんじゃ諦めるしかないよな」
「高坂先輩、諦めましょう」
　泰輔の駄々の勢いに押されたのか、剣道部員たちが泰輔の肩を持つ発言を始めた。
　猛も、泰輔がここまで駄々をこねているのなら仕方がないという気がしてきた。
「分かったよ。
　穿けばいいんだな」
「ここで穿いてくれ」
「折角だから、ここで着替えてください、高坂先輩」
「そうだよ、猛。
　男同士だしここで着替えろよ」
「高坂先輩の生着替えフォー」
　着替えるために自室に戻ろうとした猛を泰輔や剣道部員たちが引き留める。
　確かに猛は男で、剣道部員たちも男だ。
　更衣室で下着やチンポを見せ合う仲だ。
　それならば、ここで着替えてもおかしくはないのか。
　猛は納得をするとジャージを脱ぎ始めた。
　色白ながら剣道で鍛え上げられた屈強な肉体を露わにする。

そして、真っ赤なボクサーパンツ一枚になると、腰ゴムに手をかけ、ゆっくりと下ろし始めた。
無毛の下腹部が露わになり、続いて常人よりも太く長い陰茎、金玉と露わになる。
猛は全裸になるとジョックストラップを手にした。
数回手の中で回し、足を通す。
前袋をペットボトル早漏チンポに合わせると玉や陰茎を収めていく。
猛の下腹部に卑猥な赤もっこりが形成された。
泰輔が猛のチンポサイズを完璧に把握しているとしか思えないほど、ジョックストラップは猛のペットボトル早漏チンポにフィットしている。
前袋に収められたペットボトル早漏チンポはむっちりとした圧に充満しており、その卑猥なもっこりを前袋の中央を通る青いラインが強調する。
黒いゴム紐が猛の腰や臀部のラインを程よく締め付け、猛の腰回りのエロスや尻肉に詰まった雄の魅力を強調する。
猛は剣道部員たちを見回した。
尻が丸出しのジョックストラップ姿を茶化されると思ったのだ。
だが、剣道部員たちは何も言わない。
食い入るような眼差しで猛のジョックストラップ姿を見つめている。
猛としては剣道部員たちが何も言わないことが不気味であった。
剣道部員たちの眼差しも落ち着かないし、尻が丸出しであることも落ち着かない。
「なあ、もう着替えていいよな」
泰輔への義理は果たしたと判断した猛がそう声をかけると、泰輔が首を振った。
「スクワットしてくれよ、スクワット！」
再び泰輔が駄々をこねる気配を察した猛は、大きくため息をついた。
泰輔はこうなるとどうしようもないのだ。
だから猛は後頭部に両手を合わせ、ゆっくりと腰を下ろし始めた。
前袋に収まったペットボトル早漏チンポが零れるのを心配してのことだ。
だが、普段着用しているボクサーパンツに比べて布地が少ないにもかかわらず、ジョックストラップの前袋は猛のペットボトル早漏チンポにナイスフィットし、玉も陰茎も零れ落ちない。
そのフィットぶりに安心した猛は、腰を上下させる動きを徐々に早めた。
猛のもっこりは誘蛾灯のように剣道部員たちの目線を引き付けている。
スクワットを続けるうち、猛は全身に軽く汗をかき始めた。
健康的な色気に溢れた猛の身体が汗の艶によって、男を引き付ける色香を放ち始める。
軽く呼吸が乱れてきたところで、猛はスクワットを止めた。
「どうだい、猛？
ナイスフィットだろ？」
泰輔が自信満々に猛に問いかけてきた。
「ああ、確かにな」
猛が頷くと泰輔が優勝でもしたかのように胸を張った。
「なにせ、外国人向けのカップの深いジョックストラップだからな。

猛のチンポはワールドワイドチンポってことだな」
「……ださいな」
ワールドワイドチンポなどと大袈裟に宣言する泰輔に猛は冷たい目を向けた。
「なんだよ、ワールドワイドチンポ、いい言葉だろ？」
泰輔が剣道部員たちを見回すと、剣道部員たちが首を振った。
「ださい」
「ないわ」
「それだと高坂先輩の早漏が世界標準みたいなので、ないですよ」
「泰輔、頭が可哀そうだな」
剣道部員たちの酷評に泰輔が大袈裟に肩を落とした。
「それじゃ、もう脱いでいいよな」
猛は泰輔に尋ねた。
茶番にも付き合ったのだし、もう義理は果たしたと判断をしたのだ。
猛としては穿き慣れないジョックストラップを早く脱ぎたかったのだ。
だが……
「折角穿いたんだから、今日一日ぐらい着用しろよ」
「そうですよ、勿体ない」
「このセクシーさをもう止めるなんて冒涜だっつの」
次々と起こる抗議の声に猛は諦めた。
「分かったよ、今日一日我慢するよ」
猛の言葉に剣道部員たちが歓声を上げる。
ジョックストラップ姿の何がいいのか猛には分からなかったが、考えることを諦めて猛はジャージを着用し始めた。
今日は一限から授業だから、早く準備を済ませなければ。
猛はジョックストラップの違和感から意識を逸らしつつ、今日の予定を頭の中で反芻し始めた。

落ち着かない。
猛はさりげなさを装いつつ周囲の様子を観察した。
周囲を行きかう大学生たちは猛の違和感に気が付いた様子はない。
当然だろう。
普通の人間にはジャージの下の下着を透視する能力などないのだから。
猛も頭ではその程度のことは理解しているのだが、尻に当たるジャージの裏地がどうにも違和感を抱かせるのだ。
普段はボクサーパンツに覆われている尻はジャージの裏地の感触など知らない。
慣れない感触を感じ続けていることが猛にとってストレスになっていた。
こんな、尻を丸出しの下着を穿いているなんてと思うと恥ずかしくなる。
どうしてもジャージの裏地が当たる尻に意識が集中し、見られている気さえしてくる。
だから猛は午前中の授業が身に入らなかった。

辛うじてノートに記載はしていたが、中身が頭に入っていない。
あとで教科書を読みながら確認をした方がいいだろう。
猛は学食で天ぷらうどん定食を頼むと、隅の席に座った。
自意識過剰なのかもしれないと猛の理性は判断をしているのだが、どうしても今日は周囲の視線が気になるのだ。
ジョックストラップのせいでジャージに浮かぶもっこりが普段より大きく見えている気がするし、尻を丸出しにして歩いているかのような違和感も気になる。
違和感が気になるとはいえ、猛はジョックストラップを脱ごうとは思わなかった。
今日一日穿くと口に出した以上、それを反故にすることは男らしくないと思うからだ。
天ぷらうどん定食を食べ終えた猛は、セックスチケットアプリの確認をした。
猛は今日の四限は空いている。
その時間に予約が入ったのだ。
陸上部の光橋から予約が入ったのだ。
光橋はチンポの臭いが濃く、フェラチオをしているだけでケツマ〇コを犯されているかのような気分になる。
光橋とのアナルセックスを想像するだけで、猛の下腹部は切なく疼く。
とはいえ、光橋とのアナルセックスは四限の時だ。
まずは三限の講義をきちんと受けなくてはならない。
猛は深呼吸をして、光橋とのアナルセックスを脳の隅に追いやった。
そして次の講義のために移動を始めた。

猛は早足で陸上部の寮に向かっていた。
三限の講義を終え、光橋とのアナルセックスの時間を迎えるのだ。
「よお、高坂。
光橋ならいつもの部屋にいるぞ」
何度もアナルセックスのために訪れているので、猛が来訪すると陸上部員が笑顔を浮かべて応対する。
「分かった」
猛も頷き、陸上部寮の仮眠室に向かう。
仮眠室の入り口の掛札を使用中にしてから、猛は仮眠室の中に入る。
「待ってたぜ、猛」
光橋が野性味のある笑みを浮かべて猛に手を振った。
「よろしく頼む」
猛は頭を下げると服を脱ぎ始めた。
光橋もそれに応じるかのように服を脱ぎ始める。
西洋彫刻のように屈強な猛に比べると細身の光橋だが、日に焼けた身体にはしなやかさと野性味が備わっている。
猛はジャージのズボンを脱ぎ、卑猥な赤もっこりが形成されているジョックストラップ姿になった。

「へえ、ケツ割れか。
　猛にしては卑猥な下着だな」
　全裸になった光橋が半分ほど皮を被ったチンポを半ば勃起させながら猛に近づいてきた。
「ケツ割れ？」
　聞き覚えのない言葉に猛はおうむ返しに呟く。
「ん？　もしかしてケツ割れって知らないのか？」
「ああ」
　光橋の問いかけに猛は頷いた。
「ジョックストラップは」
　光橋がジョックストラップのゴム紐に合わせて掌を動かす。
「こうやって、尻が開いているだろ？」
　ピシャリと光橋が猛の尻を叩いた。
「ああ……ああ！」
　光橋の説明を受け、猛はケツ割れという言葉の意味を理解した。
「ケツが常に開けっぴろげになっているこの下着は脱がずにアナルセックスができるからケツ割れって言うんだ。
　猛もケツマ〇コ丸出しで一日過ごして、どんだけの男を誘惑したんだ？」
　光橋の卑猥な問いかけに猛は顔を真っ赤にする。
　尻が出ていることへの違和感を気にしてばかりで、猛はケツマ〇コ丸出しで一日を過ごしていたということに気が付いていなかった。
　そう考えると、ジャージを穿いていたのに全裸で大学を歩いていたかのような気がしてきて顔が熱くなる。
　そして、猛の羞恥心に反応して猛のペットボトル早漏チンポが充血し始める。
　ジョックストラップの赤もっこりを突っ張らせながら伸縮性のある生地が徐々に猛のペットボトル早漏チンポの形に合わせて伸び始める。
「おいおい、ちょっと揶揄っただけで勃起させるなんて、どんだけ卑猥なことを考えているんだよ」
　光橋が猛の赤もっこりの頂点を親指でぐりぐりと撫でまわす。
「あ……」
　敏感な亀頭への刺激に猛は浅ましい吐息を漏らす。
「折角だから、ケツ割れセックスにしようぜ」
　光橋が猛の肩を叩くと、己のチンポを指差した。
「そら、猛のケツマ〇コのために俺のチンポをしゃぶれよ」
「ああ……」
　猛は快楽にうっとりとした笑みを浮かべて、光橋の仮性包茎チンポに顔を近づけた。
　光橋は彼女がいるのだが、チンポの臭いがきついからとフェラチオをしてくれないという。
　その光橋の雄の臭いを嗅いで、猛のペットボトル早漏チンポがビクンと動く。
　猛はチンポの臭いが好きだ。
　雄臭いチンポは性欲が溢れ出そうな雰囲気がしてゾクゾクするのだ。

猛がこれまでアナルセックスをしてきた相手の中でも光橋のチンポの臭さは群を抜いている。
目隠しをされて臭いだけで光橋のチンポを当てろと言われても問題なく当てられるぐらいなのだ。
その雄臭いチンポを口に咥えると、口の中に雄の臭いが充満した。
彼女とのセックスが御無沙汰なのだろうか、猛のフェラチオに光橋のチンポはすぐに反応する。
包皮が後退し、亀頭がパンパンに膨れ、雄の獣臭さが猛の身体中に広がっていく。
これから犯されるのだという実感に猛のペットボトル早漏チンポが我慢汁を流し始める。
まだケツマ〇コには手も触れられていないというのに、猛のケツマ〇コがチンポを求めて疼きだす。
光橋のチンポが完全に勃起する。
猛は光橋のチンポを舐め回しながらうっとりとした表情を見せる。
「猛は本当に旨そうにチンポをしゃぶるよな」
「ああ、好きなんだよ」
光橋の問いかけに猛は返事をした。
猛はチンポが好きだ。
はしたないケツマ〇コに快楽を与えてくれるチンポが好きで好きで仕方がないのだ。
「こんな臭いチンポが好きだなんて、物好きだよな」
「臭いってことは、精力に満ちているってことだろ？」
光橋の言葉に猛は返事をしてから亀頭を唇で包み込む。
光橋の鈴口から雄臭い我慢汁が溢れ出しているのを猛は舌で舐めとる。
猛のペットボトル早漏チンポは完全に勃起し、ジョックストラップの布地を完全にチンポの形に変形させ、その先端を我慢汁で濡らしている。
「じゃあ、お前の大好きなチンポを入れてやるからな」
光橋が猛の腰を力強く掴み、チンポを猛のピンクアナルに押し当てる。
猛のピンクアナルは小さく窄まっているのに、手品のようににゅるにゅると光橋のチンポを飲み込んでいく。
疼いていたケツマ〇コをチンポで支配され、猛は背を仰け反らせた。
「チンポ、最高！」
心の底から猛はそう思った。
何度アナルセックスをしても、初めてのように猛は感じる。
どんなチンポも等しく猛を快楽へといざなう極上のチンポなのだ。
「今日はいつもよりも乱れているな」
光橋が野性味に溢れる顔でにやりと笑った。
「ケツを振り振り、ケツマ〇コ丸出しで過ごしている間にムラムラしていたんだろ？
どの男を咥えこもうか物色していたのか、ええ？」
「そんなことぉ！」
猛は快楽に喘ぎながら光橋の嘲笑を否定した。
そもそも猛には自分から男を誘うような甲斐性などないのだ。

　アナルセックスに目覚めた高校三年生の時も、誘われて身体を開いていたし、今でも自分から誘うことはほぼない。
　中途半端に放置プレイをされて追い詰められた一昨日の一件だけが、猛が自分からアナルセックスを求めた珍しい例なのだ。
「こんな淫乱なケツマ〇コ丸出しのスケベ下着を穿いておいて、貞淑ぶるなよな」
　光橋が猛の腰を叩きながら性の律動を叩きこむ。
　光橋にスケベ下着と罵られるたび、羞恥心が震え、快楽が高まっていく。
　光橋のチンポで奥を突かれるたびに猛は脳天から魂が飛び出しそうになる。
「あっ……あひいん……うひいいい……」
　猛は淫らな声を上げながら快楽を享受する。
　猛の下腹部では勃起したペットボトル早漏チンポの形に変形したジョックストラップの赤もっこりが半分ほど我慢汁で濡れている。
「いつもより締め付けがいいじゃないか。
　スケベ下着で興奮しているんだろ、変態」
　光橋が猛を嘲笑しながら猛で気持ちよくなるためにチンポを抜き差しする。
　光橋のチンポでケツマ〇コをゴリゴリとされるたびに、猛はチンポを扱かれることよりも何倍も何十倍も濃い快楽を覚える。
　猛の下腹部ではジョックストラップの赤もっこりがぐいんぐいんと揺れている。
　ペットボトル早漏チンポが揺れるたび、ジョックストラップの布地に亀頭が擦れてジンジンと快楽に燃料を投げ込まれる。
「ああっ！　ああん！　いいい！」
　猛はメスの如く浅ましく乱れている。
　色白の肌は羞恥に赤く染まり、うっすらと汗に濡れた筋肉質な肉体は男であるがゆえのメスの魅力をむんむんと醸し出している。
「スケベ下着でセックスして善がり狂って、どうしようもない淫乱だな！
　そんなに俺のチンポが旨いのか？」
「チンポぉ！　チンポぉ！　チンポぉ！」
　光橋の言葉責めに猛は馬鹿みたいにチンポと返事をする。
　猛はチンポが好きだ。
　淫乱ケツマ〇コを躾けてくれるチンポが大好きだ。
　ディルドでは駄目なのだ。
　猛を求める男の情欲を伴うチンポでなければ、猛の淫乱ケツマ〇コは満足できないのだ。
　だからこそ、猛はチンポを愛している。
　アナルセックスができるチンポならば貴賤なく愛している。
　ケツマ〇コを蹂躙される悦びの前にはすべてが些事なのだ。
「そら、俺と一緒にイくぞ、淫乱！」
「チンポぉ！　チンポぉおお！」
　光橋の性の律動が早まり、猛を追い詰めていく。
　猛の全神経は光橋のチンポを抱きしめるケツマ〇コに集中する。
　数多の男を受け入れてきた猛のケツマ〇コが、光橋のチンポに合わせて変形する。

　今の猛は、光橋のためだけのケツマ〇コ奴隷なのだ。
「イくぞ！　イくぞ！　イくぞ！」
「チンポぉ！　チンポおおおおおおおおおお！」
　光橋が獣のごとき荒々しさで猛のケツマ〇コで果てる。
　それと同時に猛もまた絶頂を迎えた。
　ジョックストラップの赤もっこりを飛び越えて猛のザーメンがベッドに流れ落ちる。
　常人より臭いも濃く量も多い猛のザーメンがぬとぬととジョックストラップの赤もっこりに淫猥な白を添えていった。

## 奥付

『淫穴男子大〇生猛短編集』より、「猛、初めてのショックストラップセックス」
初出：2022 年 4 月 4 日
著者：金目

金目の同人活動一覧
【pixiv】
https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005

【pixiv FANBOX】
https://may-gold.fanbox.cc/

【DLsite がるまに】
https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】
https://twitter.com/chigaya_deep